

キルギス、ク라마遺跡の発掘調査（2014～2015）

シャルギノフ・テミルラン・タシュタンベコビッチ
ソルトバエフ・オロズ・アセコビッチ
大沼 克彦

1. はじめに

我々は常にみずからのルーツを探求するだろう。したがって、我々の祖先が最初にユーラシア乾燥地域に到来した際に残した痕跡を見いだすことはユーラシア旧石器考古学における重要課題のひとつである。

デレビアンコ（Деревянка (Derevyanko)）は考古学データを精密に分析し、人類発祥の地アフリカを出発した初期の人類がユーラシア乾燥地域に到来した波を二つの時期に大別した。

第一の波は150万年前から60万年前にかけてホモ・エルガスター（Homo ergaster）のアフリカからユーラシア内奥部への到来と、それに続いた、チベット山脈とヒマラヤ山脈を境にした二方向、すなわち、アラビア/パキスタン/インド/東アジア/東南アジア方面と、イラン/タジキスタン/トルクメニスタン/キルギスタン/カザフスタン/モンゴリア/南シベリア方面への更なる進出である（Деревянка (Derevyanko) 2005）。

第二の波は45万年前から35万年前にかけて中東地域からユーラシア内奥部への到来である（Деревянка (Derevyanko) 2005）。

キルギス地方への初期人類の到来は主に第二の波に関係したと考えられている。

このような研究状況のもと、ク라마遺跡は2011年に発見された。

ク라마遺跡はキルギス共和国チューイスカヤ州パンフィーロフスキ地区ジャルデカイヌ渓谷の、ク라마墓地と現代墓地の北方を南北に細長く走る小形の風成丘の上にある重層遺跡で、北緯42°42'48"、東経73°39'19"、海拔1,133メートルに位置している。それゆえ、初期人類がキルギス高地草原地帯に到来した際の様々な痕跡を見いだすために格好な遺跡である（図1、図2）。



図1 ク라마遺跡の位置



図2 ク라마遺跡の全景

遺跡の表面で採取された土器片はこの遺跡が初期遊牧民によって立ち寄られたことを示したものの、遺跡南端斜面で濃密に採集された石器資料はこの遺跡が旧石器時代に年代づけられることを明らかにした。

かくして、キルギス国立民族大学の助成による体系的な研究計画を立てられ（Чаргынов (Chargynov) 2013；2014）、遺跡の層序を確認するための2カ所の試掘調査と周辺の遺跡探索調査が2013年におこなわれ、2014年の6月と2015年の7月から8月にかけて発掘調査がおこなわれた。

この一連の調査と発掘の団長を担ったのはキルギス国立民族大学歴史地理学部のシャルギノフ・テミルラン・タシュタンベコビッチ教授である。

大沼は平成26年度科研費基盤研究（B：海外調査）「ユーラシア古代遊牧社会形成の比較考古学」によって2014年の発掘調査に参加した。同基盤研究はユーラシア古代遊牧社会形成の前史としての旧石器研究を含んでおり、キルギス側の研究協力者であるシャルギノフ教授には常日頃から極めて協力的な共同研究を推進していただいている。本論はこの共同研究のたまものである。

以下に、2014年と2015年の発掘調査で確認された層序と出土石器の内訳を紹介する。

2. クラマ遺跡の層序

2014年の発掘調査では15平方メートルのトレンチ内に7つの層からなる5.3メートルの厚さの層序を確認し（図3）、2015年の発掘調査ではこのトレンチを6メートルの深さまで掘り下げた（図4）。

以下は自然堆積層と考古層をともに含む層序である（図5）。

1層：厚さ10センチメートルの芝混じり表土層。

2層：厚さ68～70センチメートル。木の根を含む明るい黄土層。

3層：厚さ110～130センチメートル。2層よりも高密度の水吸入孔を含む、より濃い黄色の黄土層。2014年の発掘調査で検出した第1考古層を含む。

4層：厚さ50～60センチメートル。3層よりも密度が高く、やや明色な砂質粘土層。2014年の発掘調査で検出した第1A考古層を含む。

5層：厚さ120～130センチメートルの茶色砂質粘土層。

6層：厚さ60～70センチメートルの琥珀色から灰色をした砂質粘土層。2014年の発掘調査で検出した第2考古層を含む。

7層：厚さ250センチメートルの茶色砂質粘土層。2014年の発掘調査で検出した第3考古層と2015年の発掘調査で検出した第4、第5、第6考古層を含む。



図3 発掘調査の様子（2014年）



図4 発掘調査の様子（2015年）

3. 出土石器の内訳

水平に堆積し(図6)、慎重に取り上げられた石器のほぼすべてが原位置状態で出土したことは明らかである。このことは、トレンチ内断面の観察により、また、考古層各々で出土した石器がそれぞれの同一母岩と接合することによっても明らかである。出土石器のほとんどは製作時の剥離・加工状況を完全に保持しており、縁辺が新鮮、鋭利で無傷の状態であることから、地層が動いたとは考えにくい。

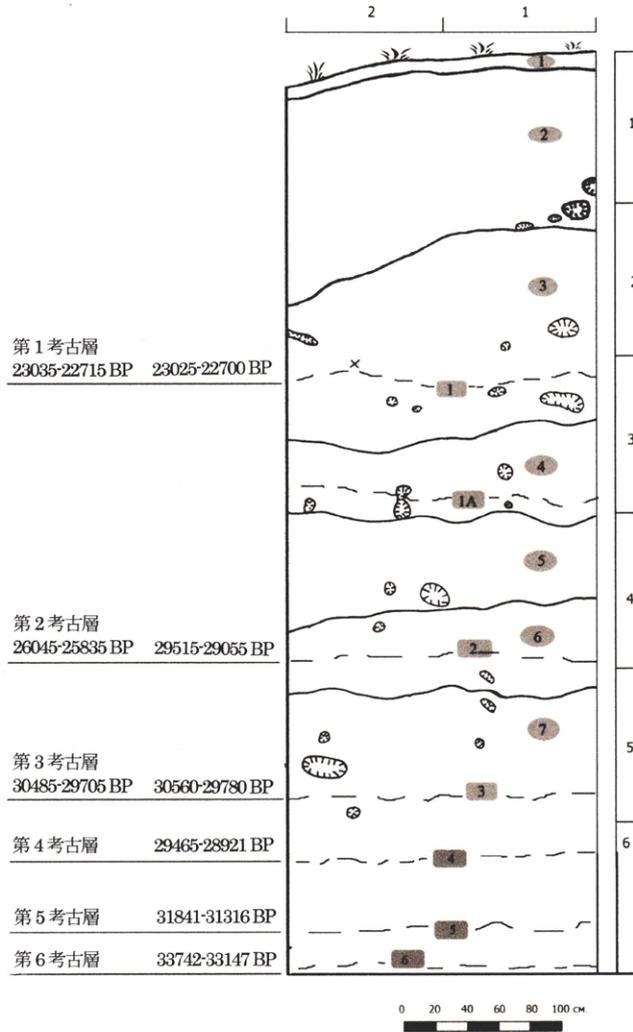


図5 トレンチ内西壁のセクション



図6 石器の堆積状況

第1考古層 (2014) : 石器総数 418 点。石核がなく、ほとんどが剥片や細石刃である (図 7)。唯一の道具石器は横長の中型素材石に加工された急角度スクレイパーである。その末端刃部の状態から、何度も使用され、時折刃部が再生されたことが分かる (図 8)。

第1A考古層 (2014) : 石器総数は 7 点。石核と道具石器はない。

第2考古層 (2014) : 石器総数は 63 点。石核はなく、唯一の道具石器は背潰し剥片である。

第3考古層 (2014、2015) : 石器総数 435 点。試し打ち痕のある素材石 2 点を含む石核が 5 点あり、全体の 1.1% を占める。試し打ち痕のある素材石はやや大形で、不規則な剥離痕を有する。単一方向剥離痕を有する片面加工石核 (80 × 42 × 29 ミリメートル) は剥離最終段階のもので、打面は小さい。剥離作業面と裏面の風化差 (ダブル・パティナ) は、より古い剥離物が石核として再利用されたことを示している (図 9)。単一方向剥離痕を有する両面加工石核 (79 × 69 × 74 ミリメートル) は剥離初期段階のもので、打面は平坦面である。角張った珪質岩石から作られている。道具石器は 27 点あり、全体の 6.2% を占める。内訳はサイド・スクレイパー (図 10-7)、剥片スクレイパー、二側辺スクレイパー、エンド・スクレイパー (図 10-1)、ラウンド・スクレイパー、背潰し剥片、背潰し細石刃、背潰し破片、角型彫器、裁断石器、エンド・ノッチである。細石刃も存在する (図 11)。

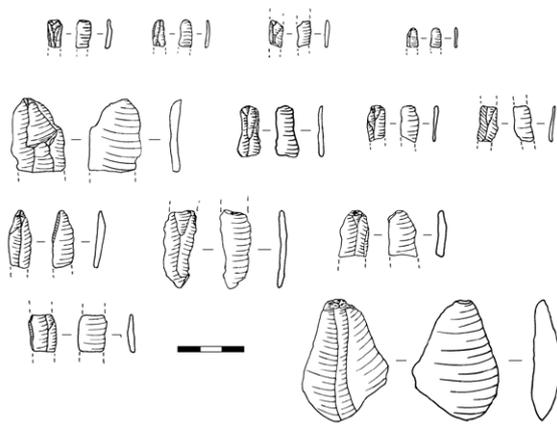


図 7 第1考古層の剥片、細石刃、二次加工痕のある細石刃

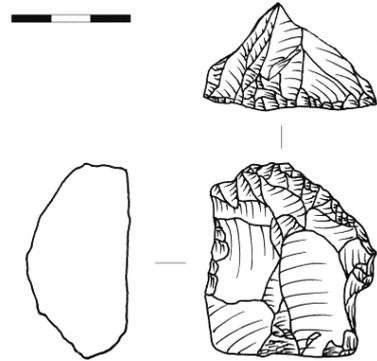


図 8 第1考古層の急角度スクレイパー

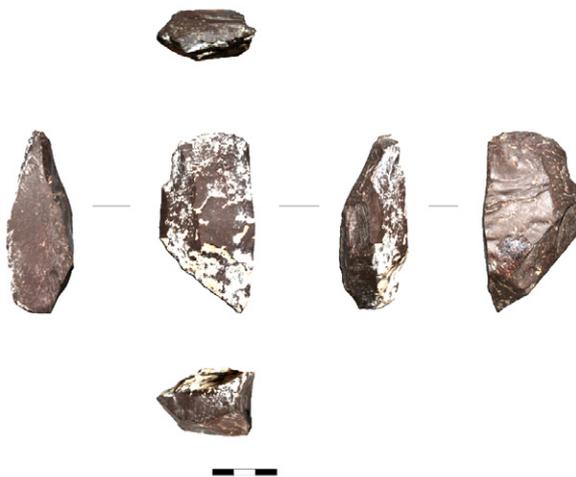


図 9 第3考古層の単一方向剥離片面加工石核

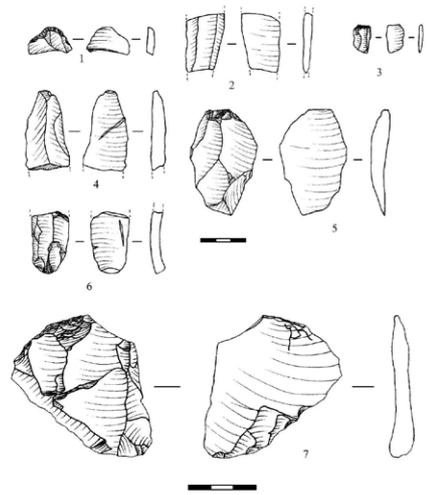


図 10 第3考古層の剥片、石刃、道具石器



図11 第3考古層の細石刃

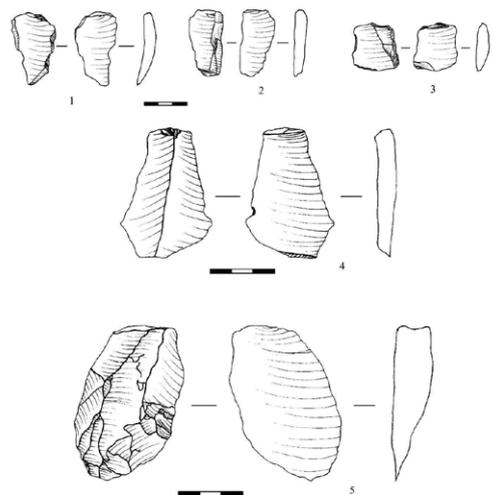


図12 第4考古層のスクレイパー

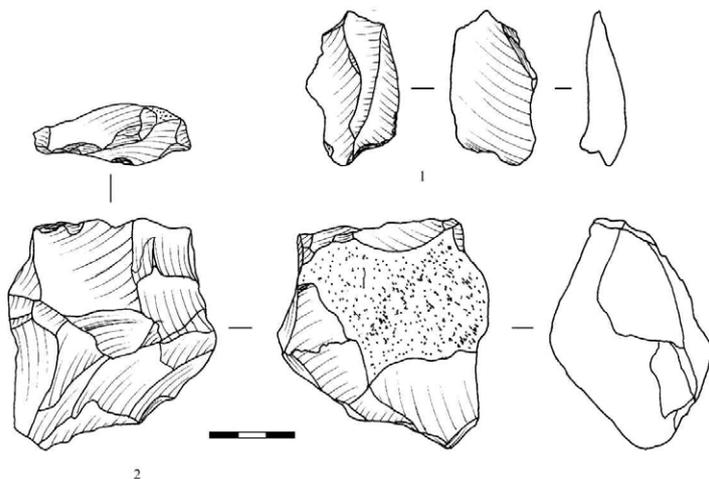


図13 第5考古層の石核、剥片

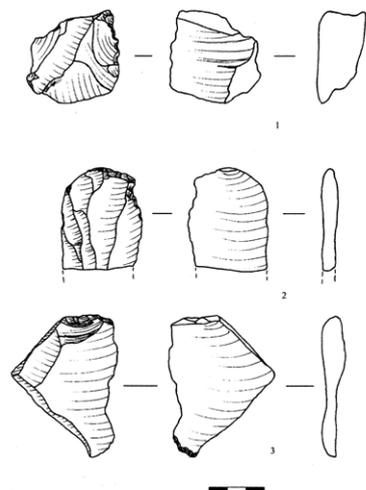


図14 第5考古層のスクレイパー、
鋸歯縁石器、ノッチ

第3 A考古層 (2014)：石器総数は2点で、ともに中期旧石器的な求心方向調整剥離痕を有する剥片である。

第4考古層 (2015)：出土石器は51点。石核はなく、道具石器は主にスクレイパーである (図12)。

第5考古層 (2015)：出土石器は1,332点。叩石1点と石核4点があり、これらは出土資料全体の0.3%である。叩石の大きさは105×71×47ミリメートルである。石核の一つ (81×66×63ミリメートル) は直行する剥離痕をもっている。求心方向剥離痕を有する片面加工石核が1点あり、80×73×51ミリメートルの大きさで、剥片剥離用のものである。打面は斜めに切子状に準備されていて、裏面には自然面が残っている (図13-2)。単一方向剥離痕を有する横長の片面加工石核は66×86×63ミリメートルの大きさで、打面はやはり斜め切子状に準備されている。この石核は剥離初期段階のものである。道具石器は16点あり、出土石器全体の1.2%である。凸状刃部を有する縦長スクレイパー2点は大型剥片に加工されたものである。刃部は鱗状の階段状二次加工で作られている。大型碎

片に作られたスクレイパーは遠端部に半円状の刃部を有している（図 14-3）。鋸歯緑石器 1 点（図 14-1）とノッチが 8 点出土している（図 14-2、図 15-1、-2）。剥片素材のナイフ型石器が 3 点あり、刃潰しされた背部は腹面からの鋭角で傾斜した階段状二次加工で作られている。

第 6 考古層（2015）：出土石器は 160 点。2 点の叩石と 4 点の石核があるが、叩石は大型河原礫の割片を利用したもので、一端に、打撃の際に生じる特有な衝撃痕がみられる（図 16）。1 点の片面加工石核プリフォームは単一方向剥離痕を有している。大型剥片を素材にし、75 × 67 × 37 ミリメートルの大きさである。このプリフォームは傾斜した打面を有し、作業面は求心方向剥離でドーム状に準備されている。割れやすいという素材の性格から、作業途中で剥離が中断され、放棄されたものだったと考えられる（図 17）。67 × 44 × 30 ミリメートルの大きさの角柱形石核は内反した折れ剥片を素材にしていて、打面は平坦で傾斜している。作業面には石刃状剥片の剥離痕と稜線がいくつかみられる（図 18）。1 点の片面加工石核の作業面は単一方向の石刃剥離痕を有している。扇状の形をしていて、30 × 35 × 25 ミリメートルの大きさである。傾斜する平坦打面を有し、側面、裏面のいずれにも剥離痕がみられない（図 19-1）。1 点の両面加工石核の打面は表、裏面ともに傾斜していて、反対方向に設けられている。22 × 27 × 12 ミリメートルの大きさである（図 19-2）。道具石器は 13 点出土しており、出土石器全体の 8.1% を占めている。大型剥片を素材にした横型スクレイパー 2 点、急角度スクレイパー 3 点、エンド・スクレイパー 2 点（図 20-1、-2）、ノッチ 1 点（図 21）、中型石刃素材のビュラン 1 点（図 22）のほか、二次加工を施された剥片（5 点）、石刃（2 点）、細石刃（4 点）が出土している。

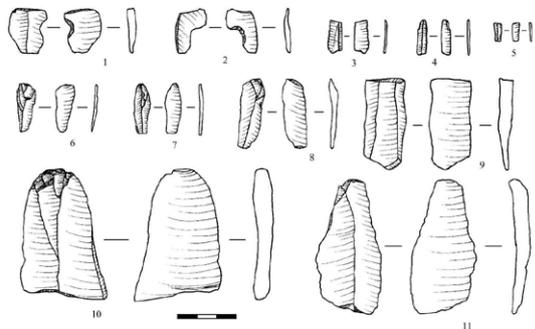


図 15 第 5 考古層の石刃、細石刃、ノッチ



図 16 第 6 考古層で出土した叩石



図 17 第 6 考古層の片面加工石核プリフォーム



図 18 第 6 考古層の角柱形石刃石核

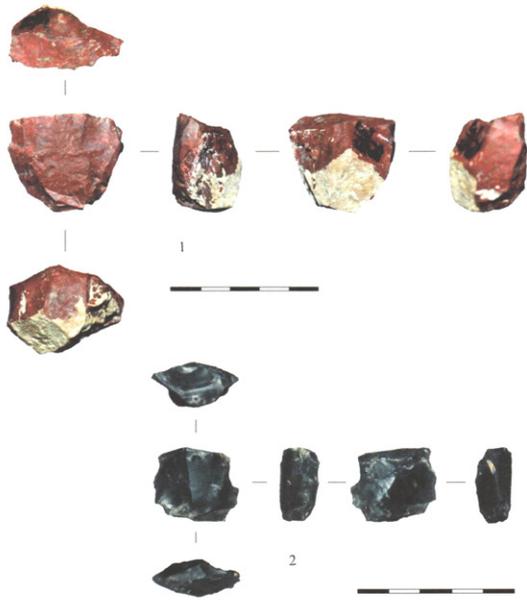


図19 第6考古層の片面加工石核、両面加工石核

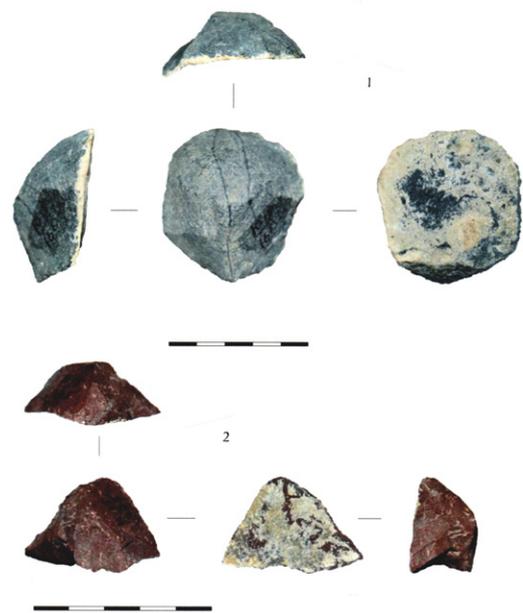


図20 第6考古層のエンド・スクレイパー



図21 第6考古層のノッチ

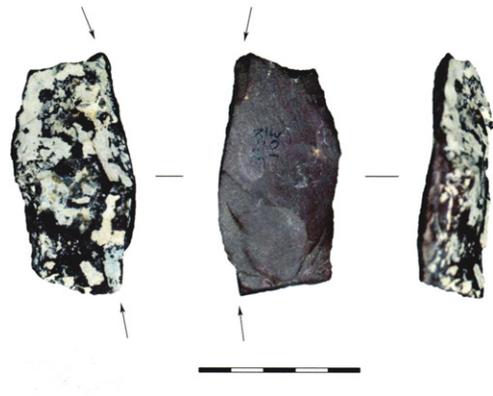


図22 第6考古層のビュラン

4. 出土石器の特徴

石器の打割り技術に関する情報をより多く備え得るのは石核である。この意味で、石核の出土が少ないクラマ遺跡での石器製作における技術的特徴を十分に解明することは困難である。

したがって本論では、出土石器の技術・形態的特徴を詳細に記述するのではなく、石核、剥片、石刃、細石刃の大まかな技術・形態と道具石器各々の出現頻度を考察し、遺跡全体としての特徴を概観することにする。

クラマ遺跡出土の石核は主に縦方向の石刃ないし剥片の剥離痕を残している。この種の石核は第3、第5考古層によくみられる。打面は概して傾斜している。石核には二重パティナを有する再利用もある。細石刃石核用のプリフォームは角柱形を呈している。

最も多く出土した剥片は小形の剥片である。石刃もまた概して小形で、第1、第2、第3考古層で

出土しているものの、第6考古層ではみられない。第2、第3、第5考古層では細石刃の出土が目立っている。剥片と石刃の打面は平坦打面が多く、次いで、点状打面が認められる。中期旧石器的な求心調整剥離痕を有する剥片も少なくない。

道具石器のなかで最も多いのはスクレイパーであるが、第2、第6考古層ではみられない。そのほか、ノッチ（第3、第5考古層）、鋸歯状石器（第5考古層）、背潰し剥片（第2、第3考古層）、背潰し細石刃（第3考古層）、背潰し破片（第3考古層）、二次加工を施された細石刃および石屑（第3考古層）などの道具石器が出土している。これらの道具石器のほとんどは剥片あるいは石刃を素材にして作られている。

5. 出土炭化物の炭素測定年代値

2014年の発掘調査ではすべての考古層で炭化物と動物骨が出土したが、特に、第3考古層の炉跡周辺では多くの動物骨が出土した。これらの試料はC14年代測定に託され、第1、第2、第3考古層で出土した6点の試料に関して以下の値（2 σ 暦年代範囲：95.4%の正確率）をもたらした（地球科学研究所 2015）。

第1考古層：23035-22715 BP、23025-22700 BP。第2考古層：26045-25835 BP、29515-29055 BP。第3考古層：30485-29705 BP、30560-29780 BP（図5）。

2015年の発掘調査でもまたすべての考古層で炭化物と明確な炉跡が出土したが、採取した試料のC14年代測定は、第4、第5、第6考古層出土試料3点に対して以下の値（2 σ 暦年代範囲：95.4%の正確率）をもたらした（伊藤 ほか 2016）。

第4考古層：29465-28921 BP。第5考古層：31841-31316 BP。第6考古層：33742-33147 BP（図5）。

6. まとめと展望

今日まで、キルギスの旧石器研究では体系的な遺物分析がおこなわれてきたとは言い難い。また、発掘遺跡の明確な層序に欠け、年代が不明であるなど多くの問題を抱えてきた。

例を挙げれば、トソル遺跡とユタサイ遺跡（Деревянко et al. (Derevyanko ほか) 2001；2003；Ранов и Несмеянов (Ranov and Nesmeyanov) 1973；Юнусалиев (Yunusaliev) 1975；Чаргынов (Chargynov) 2007a；2007b；2010) や、セリウンクール遺跡（Исламов и Крахмаль (Islamov and Krakhmal) 1995；Анисюткин, Вишняцкий (Anisyutkin and Vishnyatskiy) 2001-2002；Вишняцкий (Vishnyatskiy) 1996；Величко et al. (Velichko ほか) 1990) に関する考古学的な位置づけはいまだに論議されている状況である。

本論で紹介したクラマ遺跡の石器群は、技術・形態（石器組成）および炭化物9点のC14年代値の総合的考慮から後期旧石器時代の産物であると考えるのが妥当である（Чаргынов (Chargynov) 2015a；2015b；2015c；Чаргынов (Chargynov) and Ohnuma 2015）。先に述べた「出土石器の特徴」は、第5考古層以降に小石刃あるいは細石刃が目立つこと、そして、第5、第3考古層で剥片や石刃を素材にしたスクレイパー、ノッチ、背潰し剥片/石刃/細石刃といった後期旧石器的道具石器が目立っていることを示している。

しかしながら、1万年ほどの年代差を有する第6考古層から第1考古層の石器群のあいだには顕著な

技術・形態的差異がみられない。このことが果たして同地の後期旧石器の実体を示すものであるのか、あるいは、層ごとの石器出土数の差異や、発掘地点と遺跡内特定機能との関係を示すものであるのかという問題は、今後の継続発掘と周辺地域同時代遺跡の探索・調査によって解明されるものと思われる。

クラマ遺跡の堆積は非常に厚く、発掘トレンチ内の更なる掘り下げによる中期旧石器時代層出土の可能性も否定できない。それ故、今後の継続発掘は中期旧石器時代、中期旧石器 / 後期旧石器移行期、そして、後期旧石器時代における石器の技術・形態的進展に関する詳細な情報を提供するだろう。

クラマ遺跡はまさに、初期人類の中央アジアへの到来とその後の展開の実体像に迫るための重要な手がかりである。

謝辞

本論の内容は2つのロシア語論文にもとづいている。その一つである2014年のシャルギノフ・テミルラン・タシュタンベコビッチ氏執筆による *Новый стратифицированный памятник Курама (Кыргызская Республика)* (Онума (Ohnuma), Чаргынов (Chargynov) 2014) はカンバラリエフ・ジャニベック氏の翻訳にもとづき、「ユーラシア古代遊牧社会形成の比較考古学:キルギス、クラマ遺跡の発掘調査(2014年)」(Чаргынов (Chargynov), Ohnuma 2015) として出版した。もう一つの2015年のシャルギノフ・テミルラン・タシュタンベコビッチ、ソルトバエフ・オロズ・アセコビッチ両氏の執筆による *Собмечоро Кыргызско-японского Палеолитиче Ского Отряла По Изчехию Патяthuka, Кчрата* (Чаргынов (Chargynov), Солтобаев (Soltobaev) 2015) は崎浜ジャクリン氏が翻訳した。文末ながら、翻訳を快諾された両氏に対して心からの謝意を表したい。

文献

- Анисюткин Н.К., Вишняцкий Л.Б. 2001-2002 Древнейшие палеолитические памятники Северо-западного Тянь-Шаня, *Stratum Plus* No.1- С : 398-414 (北西天山山麓の最古の旧石器遺跡)
- Величко А.А., Арсланов Х.А., Герасимова С.А., ИсламовУ.И., Кременецкий К.В., Маркова А.К., Ударцев В.П., Чиколини Н.И. 1990 Стратиграфия и палеоэкология раннепалеолитической пещерной стоянки Сель-Унгур (Советская Средняя Азия) //Хроностратиграфия палеолита Северной, Центральной и Восточной Азии и Америки, *Новосибирск* С : 76-79 (ソ連中央アジアのセリ・ウンクール洞窟居住地の層序とパレオ・エコロジー: 北・中・央東アジア・アメリカの旧石器時代の編年)
- Вишняцкий Л.Б. 1996 Палеолит Средней Азии и Казахстана, *СПб Европейский дом* 213С (中央アジアとカザフスタンの旧石器時代: サンクトペテルブルグとヨーロッパの居住遺跡の比較考察)
- Чаргынов Т.Т. 2007a *Местонахождение Юташ-Сай в палеолите Южного Кыргызстана в корреляции с памятниками сопредельных территорий//Этносоциальные и этнокультурные процессы в Кыргызстане с древнейших времен до наших дней*, Бишкек (南部キルギスのユタサイ旧石器遺跡と隣接地域の関係: キルギスにおける太古から現在に至る民族文化形成のプロセス)
- Чаргынов Т.Т. 2007b *Многослойный стратифицированный палеолитический памятник Юташ-Сай // Материалы по археологии Кыргызстана*, Бишкек (ユタサイ重層旧石器遺跡: キルギスタンの考古学資料)
- Чаргынов Т.Т. 2010 *Памятник Юташ-Сай (Уйташ-Сай) в палеолите Южного Кыргызстана*, Бишкек (南キルギスのユタシユ・サイ旧石器遺跡)
- Чаргынов Т.Т. 2013 Кыргызстан в эпоху палеолита // Евразия в кайнозойе. Стратиграфия, палеоэкология, культуры, *Иркутск* С : 211-221 (キルギスの旧石器時代: 新世代のユーラシア: 編年、パレオ・エコロジー、文化)
- Чаргынов Т.Т. 2014 Первоначальное заселение территории Кыргызстана и ее место в палеолите Центральной Азии и Сибири (Курама – новый памятник палеолита в Чуйской области) // Научные про-

- екты в рамках гранта КНУ имени Ж. Баласагына на научные исследования, Бишкек С : 105-116 (Киргистанへの人類の初期移住と中央アジア・シベリアの旧石器時代)
- Чаргынов Т.Т. 2015а *Стратифицированный памятник Курама (раскопки 2014 г.) // Результаты и проблемы изучения каменного века Евразии*, Алматы (Курама遺跡の層序 : 2014 年の発掘調査)
- Чаргынов Т.Т. 2015b *Первоначальное заселение территории Кыргызстана и ее место в палеолите Центральной Азии и Сибири (Стратифицированный памятник Курама (раскопки 2014 г.)) // Научные проекты в рамках гранта КНУ имени Ж. Баласагына на научные исследования*, Бишкек (中央アジア・シベリアの旧石器時代におけるキルギスへの初期人類の入植 : 2014 年の Курама 遺跡発掘調査の層序から)
- Чаргынов Т.Т. 2015с *Стратифицированный памятник Курама (раскопки 2014 г.) // Кыргызстан жана Борбордук Азия – баарлашуунун мейкиндиги. Этностор аралык мамилелерди бекемдоонун отумушу, учуру жана келечеги*, Бишкек (Курама遺跡の層序 : 2014 年の発掘調査)
- Чаргынов Т.Т., Ohnuma K. 2015 *ユーラシア古代遊牧社会形成の比較考古学 : キルギス、Курама遺跡の発掘調査 (2014 年)*、日本西アジア考古学会編『平成 26 年度考古学が語る古代オリエント : 第 22 回西アジア発掘調査報告会報告集』、66-71 頁
- Чаргынов Т.Т., Солтобаев О.А. 2015 *Совместного Кыргызско-японского Палеолитического Отряда По Изучению Памятника, Кчрата* (キルギスと日本の共同調査 : 旧石器時代遺跡 Курама の考古学発掘調査)
- 地球科学研究所 2015 『放射性炭素年代測定 報告書 (No. 20026412)』
- Деревянко А.П. 2005 *Древнейшие миграции человека в Евразии и проблема формирования верхнего палеолита // Археология, этнография и антропология Евразии*, Новосибирск (古代の人類はユーラシアにいつ移住したか : ユーラシアの考古学・人類学・民俗学)
- Деревянко А.П., Зенин А.Н., Табалдиев К.Ш., Рыбин Е.П., Славинский В.С., Цыбанков А.А. 2001 *Новые результаты исследования палеолитического местонахождения Тосор (Кыргызстан) // Проблемы археологии, этнографии, антропологии Сибири и сопредельных территорий. – Новосибирск: Изд-во Ин-та археологии и этнографии, СО РАН Т. VII-С : 76-78 (旧石器遺跡 トソルの研究最新報告 : シベリア及び隣国の考古学・人類学・民俗学)*
- Деревянко А.П., Зенин А.Н., Табалдиев К.Ш., Рыбин Е.П., Чаргынов Т.Т., Цыбанков А.А. 2003 *Результаты исследований местонахождения Юташ-Сай в 2003 г. // Проблемы археологии, этнографии, антропологии Сибири и сопредельных территорий. – Новосибирск : Изд-во Ин-та археологии и этнографии, СО РАН Т. IX-ч-I-С : 87-91 (ユタシュ・サイ遺跡の研究報告 : シベリア及び隣国の考古学・人類学・民俗学)*
- Исламов У.И., Крахмаль К.А. 1995 *Палеоэкология и следы древнейшего человека в Центральной Азии, Ташкент-Фан 220С* (中央アジアの古生態学および古代人の痕跡)
- 伊藤茂、安昭炫、佐藤正教、廣田正史、山形秀樹、小林紘一、Zaur Lomtavidze 2016 『キルギス採取炭化物の放射性炭素年代測定』、パレオ・ラボ
- Онума К., Чаргынов Т.Т. 2014 *Новый стратифицированный памятник Курама (Кыргызская Республика)* (新たに発見された Курама 重層遺跡 (キルギス共和国))
- Ранов В.А., Несмеянов С.А. 1973 *Палеолит и стратиграфия антропогена Средней Азии, Душанбе: Дошиш С : 162* (中央アジアの第四紀地層と旧石器時代)
- Юнусалиев М.Б. 1975 *Предварительные результаты исследования мустьерской стоянки Тосор // Археологические памятники Прииссыкуля, Фрунзе С : 42-51* (トソル・ムステリアン期の居住地研究の中間報告 : イシク・クール周辺の遺跡)